



Title	話者の推量あるいは疑念を表わす副詞—vielleicht, wohl, vermutlich, wahrscheinlich, offenbar—について
Author(s)	佐藤, 修子
Citation	独語独文学科研究年報, 10, 1-31
Issue Date	1984-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25645
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_P1-31.pdf



話者の推量あるいは疑念を表わす副詞 —
vielleicht, wohl, vermutlich, wahrschein-
lich, offenbar — について

佐 藤 修 子

0. はじめに

下記例1～5の文はvielleicht, wohl, vermutlich, wahrscheinlich, offenbarをそれぞれどのように入れ換えても正しい文として成り立つ。

1. Ich habe vielleicht das Schild übersehen. Vielleicht habe ich den Namen falsch gelesen. (Brasch, S.14)
2. Meine Mutter, in der Sorge, das frühe Aufstehen und das Verweilen in der kalten Kirche könne meiner Gesundheit schaden, verbot es mir, der Großonkel aber sprach für mich, und endlich willigte die Mutter ein, wohl in der Annahme, daß diese kindliche Laune bald von selbst vorüberginge. (Rinser, S. 72)
3. Viele neue Wörter wären vermutlich nicht oder anders gebildet worden, wenn nicht mit den Kanji eine große Menge chinesischer Fremdwörter ins Japanische importiert worden wäre. (Coulmas, S.12)
4. Sein Grinsen kam wahrscheinlich von den Skrupeln, die er hatte, weil er sich dergleichen nicht einfach verschwieg. (Walser, S.14)
5. Dies ist aber, im Gegensatz zu dem, was offenbar viele Japaner glauben, keine intrinsische Eigenschaft des Japanischen. (Coulmas, S. 8)

同じ文脈の中にこれらの副詞を代入して出来る五つの文を較べてみると、たとえば例1のvielleichtの代りにwohl, vermutlich, wahrscheinlich, offenbarを入れた文を比較すると意味が非常に似ていると同時に微妙に違っている。

1. a) Ich habe vielleicht das Schild übersehen.
b) Ich habe wohl das Schild übersehen.
c) Ich habe wahrscheinlich das Schild übersehen.
d) Ich habe vermutlich das Schild übersehen.
e) Ich habe offenbar das Schild übersehen.

上の五つの文の意味の違いは明らかに下線部の異なる副詞によるが、これらの副詞に共通しているのは推量あるいは疑念という話者の心的態度を表わしている点である。vielleicht, wohl, vermutlich, wahrscheinlich, offenbar は話者の心的態度を表わすこの他の副詞と共に、一般の副詞とは区別され、Modalwort (Erben, Helbig/Buscha)あるいはModaladverb (Brinkmann)と呼ばれている(注1)。Modalwort (Brinkmann ではModaladverb)が他の副詞と区別される理由の一つに、他の副詞と nicht の位置を異にする点があげられる。Modalwort は文全体にかかり、否定の範囲には入らない。一般に副詞は nicht で否定され得るので nicht は副詞の前に来る事が出来、事実多くの場合 nicht は副詞の前に置かれるが、Modalwort の場合は nicht で否定されないので nicht が Modalwort の前に来る事はない。

さてModalwort は意味的には話者の心的態度を表わすもので、これには話者の推量の他に陳述内容を強調するもの、話者の感情を表わすもの等々があり、どの単語をModalwort として扱うか、又 Modalwort をどう分類するかは文法家によって異なる。先にあげた五つの副詞は Brinkmann では陳述内容を仮定として特徴づけるものに分類される。Helbig/Buscha の文法はModalwort を意味上大きくモダリティー (Modalität)と感情 (Emotionalität)に分け、それぞれをさらに下位区分し、モダリティー表現のModalwort についてはこれを四つのグループに分け、先にあげた五つの副詞を話者の推量・疑念を表わすものとして分類している。しかし両者とも一つ一つのModalwort の詳しい意味・用法についてまでは言及していない。Brinkmann はある種のModalwort を陳述内容が事実であるか又は仮定なのかを特徴づけるものとして扱い、「個々のModaladverb は確かさの度合いや与えられた情報の根拠づけを変える」と説明する。そしてたとえば、「vermutlich や voraussichtlich によって話者は自分の仮定が推測あるいは予期に基づいている事を表現し、又 vielleicht や wohl は情報が仮定である事を表わす(注2)」と述べているが、これ以上の詳しい意味はここでは明らかではない。Helbig/Buscha は話者の推量・疑念を表わす Modalwort をさらに三つに細分するが、そこでは上の五つの副詞のうち offenbar が他の四つと区別されるにすぎない。即ち、offenbar は明白な外見的事実を根拠とする話者の推量を表わし、wohl, vielleicht, vermutlich, wahrscheinlich は慎重さを伴う疑念から強い疑念に到るまで様々な度合の、話者自身によって根拠づけられる疑念を表わすという説明である(注3)。ここでも意味の違いは明らかにされていない。

我々が外国語を使用する際に非常に難しい事の一つは、意味の似ている言葉の使い分けである。この小論文では五つのModalwort の意味及び用法の違いを多少なりとも明らかにしてみたい。以下では短編小説、会話テキスト、エッセイ等から例を集め、代入テストを行い、代入不可能な例文を文脈に照らして検討するという方法をとった。代入テストにはドイツ人インフォーマントの助けを借りた。話者の推量を表わすModalwort を五つに限ったのは、用例が多く見つかり使用頻度が

高いと判断したからである。作業順序としては、まず意味の違いを考慮せず文脈の中で入れ換えが可能かどうかを調べ、すべてのModalwort が可能な場合は考察の対象からはずした。冒頭に例を一つずつあげ、いずれもすべて代入可能と述べたが、集まった例のほとんどの文脈 でこの五つのModalwort は入れ換えが可能であった。但し各文の間には微妙なあるいはかなりの程度の意味の違いがあると考えられる。又、wohl は語順の制限があり冒頭に立てないので、wohl 以外の例でModalwort が文頭に來ている時は語順の変換が必要であるが(注4)、語順を変えれば多くの場合入れ換え可能である。五つのModalwort が相互に入れ換え可能な場合は、文脈からこれら五つのModalwort の意味の違いを判断することは不可能なので、先にも述べたように考察の対象からはずし、入れ換え不可能な例文を検討し意味や用法の違いを求めた。それ故本論でとりあげる例はすべてなんらかの意味で代入不可能なものばかりである。

1. vielleicht

1.1. vielleicht の意味

下記例6は vielleicht しか使えず、他の四つのModalwort 即ち offenbar, vermutlich, wahrscheinlich, wohl を代入する事が出来ない文脈の例である。

6. Vielleicht lassen sie mich ans Telefon, vielleicht nicht. Du kannst es versuchen. (Schneider, S.38)

6. a) *Offenbar/Vermutlich/Wahrscheinlich/Wohl lassen sie mich ans Telefon, offenbar/vermutlich/wahrscheinlich/wohl nicht. Du kannst es versuchen.

場面は、入院している男が見舞いに來た若い恋人に電話をかけてもよいかと尋ねられ、それに答えるところである。文脈から判断すると、話者は事態が起る確率を半々とみている。そしてそのことを vielleicht によって表現している。電話口に行かせてもらえるかもしれないし、ダメかもしれない。事実がどうなるかは全くわからないが、その可能性は半分とみていると解釈できる。ここに他の四つのModalwort が使えないのは、これらがすべて可能性の高い推量を表わすからであろう。又、wohl は文頭に立てないので例6 a) では語順の点でも非文となる。

次の例7の vielleicht も先の四つのModalwort のいずれとも入れ換えが出来ない。

7. Helmut sei sich, das fühle er, Klaus Buch, deutlich, der Gefahr der Stagnation schärfstens bewußt. Vielleicht habe Helmut sogar schon resigniert. Er, Klaus Buch, glaube das nicht. Er glaube eher, Helmut spiele sich Resignation zur Zeit vor, ... (Walser, S.111)

この例では、話者は自分が信じていない事柄をもしかしたらそういう事があるかもしれないと仮定している。後続する文がその事を表わしている。信じていないのであるから、話者は自分が仮定している事態のあたる確率を非常に低くみていると考えられる。

次の例8も同様に話者が信じていない事柄を仮想している。但し話者が事態を事実と思っていない根拠づけは例7よりも多少消極的であるように思う。

8. Vielleicht ist Sabine imstande, dieses Leute betrachten zu genießen.
Er glaubte das nicht. Dann müßte sie ganz anders sein als er.
Ist sie aber nicht. Sie haben auf einander gewirkt. (Walser, S.17)

この例では、offenbar, wahrscheinlich, wohl (語順を変え wohl を文中に置いて) が代入不可という点でインフォーマントの意見は一致したが、vermutlich については不可能だとする意見と少しおかしいと言えるかもしれないという説とに分かれた。いずれにせよ例7と例8から、話者がそう信じていない事柄には vielleicht は使えないという事が出来る。

ところで例7及び例8の vielleicht は möglicherweise や womöglich と入れ換える事が出来、このことから möglicherweise や womöglich が非常に確信度の低い仮定を表わすと推察できるが、例が見つからなかったためこの二つの Modalwort は考察の対象からはずした。

次の例9、例10、例11も möglicherweise あるいは womöglich しか代入できない文脈の例である。

9. Höchstens eine Muschelschale, ein winziges Farnblatt, vielleicht eine Blüte oder vielleicht... (Kilian, S. 36)
10. Du kannst sagen, ich bin undankbar. Vielleicht bin ich undankbar.
Vielleicht ist es auch nur, daß ich vor zehn Tagen einen Telefonanruf ausführen wollte und ... (Schneider, S.13)
a)
b)
11. -Es ist dein Beruf, Substanzen zu kombinieren. Es ist nicht dein Beruf, über theoretische Lebensläufe nachzudenken.
-Du weichst mir aus.
-Vielleicht. (Schneider, S.8)

例9は、話者である少年が石の中に何かはいつているに違いないと思込んでいる、しかしそれが何であるかは全然わからない、そこでいろいろ想像する場面である。事実がどうであるか話者には全く未知、不明で種々の可能性が考えられる場合である。

例10では、「自分は恩知らずなのかもしれない。」と話者が自分の事を判断して言う際に a) vielleicht を使っている。 vielleicht はこれまでの例からみると話者が半信半疑あるいは信じていないような場合に使われる。例10では意味の変化を無視すれば、最初の a) vielleicht

の所に *offenbar*, *vermutlich*, *wahrscheinlich*, *wohl* (語順の変換は必要) を入れる事が出来る。しかし後の b) *vielleicht* は *möglicherweise*, *womöglich* と入れ換える事は出来ても、他の四つは先行する文の制約を受けて使う事が出来ない。これは、話者が最初にある事柄を仮定して述べた場合、その事柄と異なる事態を次に可能性として述べる事は出来ても、確信度の高い推量として述べる事は出来ないからだと考えられる。

例 11 は、相手の質問に答えたくない話者が、逆に相手になぜそんな事に関心を持つのかと執拗に尋ねて話を躲そうとする場面の続きである。話者の「君の仕事は物質を結合することで、理論上の経歴をあれこれ考えるのは君の仕事じゃない。」という言葉に、相手は「あなたは私の質問を躲す気ね。」と言う。話者は「そうかもしれない。」あるいは「そう解釈してもかまわない。」という気持で、つまり自分についての相手の言い分を半分認める意味で *vielleicht* を用いている。このような使い方が出来るのは *vielleicht* が非常に確信の弱い仮定を表わすからだと考える。自分に関する相手の言い分を認める時に、話者がかなり強い確信を持って自分の事を推量するのは不自然である。*offenbar*, *wahrscheinlich*, *vermutlich*, *wohl* が使えないのは、それらが確信度の高い推量を表わすからであろう。

さて次の例 12 はこれまでの例とは異なり、五つの Modalwort のうち *vielleicht* だけが代入出来ないものである。

12. Er hatte wahrscheinlich kein schlechteres Gedächtnis als andere.
Auch zogen ihn Jugend und Kindheit in der bekannten Weise an.
(Walser, S.29)

多少の疑念を持つとしても話者は自分の記憶力が他人より劣るとは思っていない。後続する文もそれを裏づけている。このような場合には、話者の確信度が低く疑念の強いいわば半信半疑の *vielleicht* は使えない。

最後の例 13 は、*eventuell* で言い換えられる *vielleicht* の例である。この文脈では他の四つの Modalwort を用いる事が出来ない。又例 7～例 11 のように *möglicherweise* や *womöglich* を入れる事も出来ない。即ち推量の Modalwort とは異なる *vielleicht* といえるものである。

13. „Und was willst du dann werden?“ fragte die Mutter Hans.
„Ich weiß es noch nicht. Vielleicht möchte ich Rechtsanwalt werden.“
(Kawashima/Hioki, S.27)

「将来何になるつもりか」と母親に聞かれて、「まだわからない、できれば弁護士になりたい。」と答える場面である。この場合の *vielleicht* (あるいは *eventuell*) は、話者が弁護士になりたいかどうかまだ確信していないという点と周囲の状況がそれを許してくれるかどうか分からない

という事を含めて話者の推量を表わしていると解釈できる。しかし話者が自分の意志を推量あるいは仮定するのはおかしい。確信度の高い推量を表わす Modalwort が使えないのは当然であり、自分の願望に *vielleicht* が使えるのは、この Modalwort が話者の半信半疑を表わし、場合によってはそういう事もあり得るという事を表わすからであろう。

これまでの例から *vielleicht* は、話者に全く確信がなく、どちらかと言えば話者が信じていない事柄があるいはそういう可能性もあるかもしれないと仮定する時に用いられる、と考えられる。

1.2. *vielleicht* と疑問文及び命令文

ここで扱う五つの Modalwort のうち疑問文に用いる事が出来るのは *vielleicht* と *wohl* だけである。そこで次に疑問文に現われる *vielleicht* について考えてみよう。

14. *Hätten Sie nicht Lust vorbeizukommen? Vielleicht mit Frau Schönhuber?* (NHKラジオ, 6月, S.62)
15. *Ich weiß nicht. Ich bin auch fremd hier. Vielleicht fragen Sie den Fahrer.* (Brasch, S.12)
16. *Wissen Sie vielleicht auch, von welchem Bahnsteig der Zug abfährt?* (NHKラジオ, 6月, S.56)
17. A: *Nein. Meine Mutter hat übermorgen Geburtstag.*
B: *Dieses Armband vielleicht?*
A: *Nein. So ein Armband gefällt Mutti bestimmt nicht.* (NHKテレビ, 6月, S.5)
18. *Kann ich vielleicht auch mitkommen?*
19. *Kommst du vielleicht auch?*
20. *Entschuldigen Sie, könnten Sie mir vielleicht sagen, wie ich zur Gedächtniskirche komme?* (NHKテレビ, 9月, S.37)

例14～例20の *vielleicht* は直接話者の推量を表わしているものではない。筆者は、*vielleicht* を辞書で調べ、「ひょっとしたら、もしかすると、ことによると、あるいは、多分、おそらく」という意味である事を確認した生徒に、上記例14以下のような文の中でなぜ *vielleicht* が使えるのかと説明を求められた事がある。例14以下の用法は日常会話によくみられるが、辞書に使い方の詳しい説明がない為日本人には使いこなせず、又日本人特有の誤用にも関係していると思われるので以下で取りあげたい。

さて、ここにあげた七つの例の *vielleicht* は前節例13と同様に *eventuell* でしか言い換える事が出来ない。(一部 *wohl* が使えるが、それについては後述する。) 又この七つの例文はす

べて平叙文ではないという点で共通する。即ち例 14 は疑問文で勧誘の表現、例 15 は命令文、例 16～例 19 は疑問文、例 20 は疑問文の依頼表現である。そこでまず、疑問文や命令文に推量の Modalwort が使えないのは何故なのかを検討し、次に、それにもかかわず疑問文や命令文に *vielleicht* が使えるのは何故かを考えてみよう。

上野田鶴子は日本語・英語のモダリティーに関する論文の中で、文のタイプ即ち平叙・疑問・命令等が話者の聴者に対する働きかけを表示するものでモダリティーの範疇に属する文法形式である事を指摘している。上野によれば「平叙・疑問・命令等、いずれも話者が聴者に命題内容を表明する場合にどのように命題を受けとめるべきかを指示しているものとみなすことができ(注5)」、この点から Modalwort と疑問文及び命令文の関係を考えれば、相手に何かを要求する事と話者が自分の推量あるいは疑念を表明する事は同時に成立しないから、命令文や疑問文の中で話者の推量・疑念を表わす Modalwort が使えない事になる。

又、Brinkmann はモダリティーの言語的表現手段の一つとして動詞の法(命令法、直接法、接続法 I・II)をあげ、その中で命令法について次のように述べている。「疑問が相手に言語的な反応、即ち答を要求するのに対し、命令法は行為、即ち実際の行動による反応を期待する。命令法に対する相手の答はそれに直接続く実行ということになるが、これは勿論拒否されることもある。いずれにせよ常に話しかけられる相手が存在すること、その人が話し手と同じ状況を分け合っていることが前提である(注6)。」即ち疑問文も命令文も直接相手に面と向って何かを要求する訳で、その事と話者がかなりの確信を抱いて推量することとは両立しない。推量を表わす Modalwort が疑問文や命令文に用いられないのは、お互いに両立しないモダリティーの表現手段である為と考えられる。

事実又、例 14 以下の疑問文の例は肯定文に直すと推量の Modalwort を用いる事が可能となる。

16. a) Sie wissen wahrscheinlich auch, von welchem Bahnsteig der Zug abfährt.

例 16 a) は、知っている可能性が高いと話者が判断した相手に対して使える表現で、例えば駅で駅員に尋ねる場合にはこの表現が使える。

例 15 の命令文に推量の Modalwort が使えない事は先に述べたが、次の例 21 のように話法の助動詞を用いた命令文に近いものも、ある特殊な状況を除けば *vielleicht* しか使えない。

21. Vielleicht solltest du Helene Buch anrufen, sagte er.

(Walser, S.124)

例 21 は、たとえば誰かが電話番号を書いた紙を置いていったというような状況のもとではその紙を見て話者が推量する事が可能で、このような状況に於てのみ *wahrscheinlich* が使える。しかし文脈から判断してこの文が「電話した方がいいんじゃないか」と相手にある行為を要求する意味

で用いられている場合には *vielleicht* しか使えない。相手に行為を勧めると同時に推量する事は出来ないからである。さてそれでは、一般に話者の推量・疑念を表わす Modalwort に分類される *vielleicht* が疑問文や命令文に使えるのは何故だろうか。それは *vielleicht* が話者の確信度の非常に低い推量を表わすからだと考えられる。そして命令文や疑問文に用いられる *vielleicht* が *eventuell* で言い換えられる事からも推察出来るように、*vielleicht* はそこではもはや本来の推量の意味を持たなくなる。それでは疑問文や命令文に於ける *vielleicht* はどのような意味を持つのだろうか、*vielleicht* のある文とない文を較べてみよう。

先の例 21 は語順を変えれば *vielleicht* がなくとも文は成立する。

21. Vielleicht solltest du Helene Buch anrufen, sagte er.

21. a) Du solltest Helene Buch anrufen, sagte er.

上の二つの文には意味の違いはほとんどない。ただ *vielleicht* のない例 21 a) の表現は語調が強く、例 21 のように *vielleicht* が入ると丁寧な感じがする。これは先の例 14～例 20 の疑問文や命令文にも言える事で、これらをそれぞれ *vielleicht* をとった文と比較してみると、*vielleicht* を入れた場合の方が語調が柔らかく丁寧な感じがする。*vielleicht* はいわば、「丁寧」の表現に用いられている、といえる(注7)。

しかしながら例 14 以下の文に於ても推量の要素が全くなくなってしまった訳ではない。ここに話者の確信度の低い推量を表わす *vielleicht* が疑問文や命令文に使える理由があると考えられる。

例 17 は客に向かって売り手が「このブレスレットはどうか」と勧める場面である。

17. Dieses Armband vielleicht?

これは、Gefällt Ihnen vielleicht dieses Armband?あるいは Möchten Sie vielleicht dieses Armband? が省略された形と考えられ、話者は *vielleicht* を用いる事によりあからさまに相手の好みや願望を問う事を避け、慎重かつ丁寧に尋ねていると解釈出来る。他方話者はその品物が相手の気に入っているのか、あるいはその品物がほしいのかどうか確信がない訳で、話者の不確かさを表現しているという点では推量の意味を残している。

例 19 も Können wir annehmen, daß du auch kommst? と解釈出来るように話者の推量が残っているが、話者の推量そのものを表現している訳ではない。

19. Kommst du vielleicht auch?

例 19 は語調によっては相手を非難する意味になる、とインフォーマントは言う。次の例 22 の *vielleicht* も多くの場合非難の意味で使われるという。

22. Gehst du vielleicht auch dahin?

「君もあんな所へ行くのか」、「まさかそんな所へ行くなんて」というような意味である。非難の

表現については *vielleicht* にこのような使い方があることを指摘するにとどめたいが、ここにも話者の疑念の意味は残っている。

例 14 以下を通して、話者の推量を直接表わすのではなくいわば丁寧の表現ともいえる *vielleicht* の使い方をみてきた。これに関連して次に *vielleicht* と否定詞 *nicht* の位置関係を検討してみたい。序文でも述べたように Modalwort は *nicht* で否定されないので *nicht* は Modalwort の後に来る (注 8)。

6. *Vielleicht lassen sie mich ans Telefon, vielleicht nicht.*

23. *Ein paar hundert Leute würden wahrscheinlich nicht so denken und fühlen und handeln, wie sie es tun, wären sie mir nicht über den Weg gelaufen. (Schneider, S.31)*

24. *Ich will es nicht lang machen. (Brasch, S.59)*

25. *Wenn ich was Besseres wüßte würde ich jetzt nicht hier stehen. (Brasch, S.19)*

例 6 と例 23 は Modalwort、例 24 と例 25 は副詞の例である。

ところで先の例 14 ～例 20 に否定詞 *nicht* が入る場合を考えてみよう。ドイツ人インフォーマントに確かめたが、この場合 *nicht* は *vielleicht* の前に来る。ただし *nicht* の入った表現は不自然な響きがするという。又例 19 は後述するように前後どちらにも *nicht* が来れる。

20. a) *Entschuldigen Sie, könnten Sie mir nicht vielleicht sagen, wie ich zur Gedächtniskirche komme?*

例 20 a) が不自然なのは、例 20 が依頼の文であって、このような場合話者は教えてもらえる事を想定して相手に道を尋ねるのが普通であり、否定を含んだ言い方は一般的とは言えない為である。

ここで日本語の否定詞「ない」について考えてみよう。先に例 14 ～例 20 の *vielleicht* は丁寧の表現である事を見て来たが、日本語の「ない」も丁寧あるいは主張を柔らげる働きをする場合がある。それ故日本語では人に物を尋ねたり依頼する時には、大抵否定詞「ない」と疑問詞「か」を用いて「～ませんか」の形をとる。「一緒に音楽会へ行かないか」と誘う時に、日本人はよく *Können Sie nicht mit mir ins Konzert gehen?* という表現を使う、と自分の経験を話してくれたドイツ人がいるが、これは恐らく日本語からの影響だろう。誘われる方が事前に行かない旨をほのめかしてあり、誘う側が相手の行けない事を前提としている場合ならこのような言い方は出来る。しかし何の前ぶれもなく突然誘いを受けつつそれを否定されているのでは、誘われた方が奇異な感じを受けるのであろう。ドイツ語では依頼や勧誘の文は事柄が実現される事を前提としており、又ドイツ語の *nicht* は事柄を否定する語で日本語のように丁寧の意味は持たない。先の音楽会に誘うドイツ語文はこの文型を用いかつ丁寧にしたければ *nicht* の代りに *vielleicht*

を使うべきで、Können Sie vielleicht mit mir ins Konzert gehen? となると思う。

さて例 19 の文では nicht は vielleicht の前にも後にも来る事が出来る。

19. Kommst du vielleicht auch?

19. a) Kommst du vielleicht nicht auch?

19. b) Kommst du nicht vielleicht auch?

インフォーマントに確認したところでは、どちらの場合も話者は相手が来る方により重きをおいて仮定している。つまりこの二つの文では auch が重要な意味を持つと考えられ、いずれの場合も auch に強調が置かれている。又、例 19 から auch を取り除いた文は非文となる。

19. c) *Kommst du vielleicht?

19. d) *Kommt er vielleicht?

19. e) Kommt er vielleicht noch/bald?

先に疑問文と推量を表わす Modalwort が両立しない事を見てきたが、例 19 c) や例 19 d) が非文なのは、vielleicht に強調が置かれ、話者の推量・疑念が前面に押し出されるからではなからうか。それ故疑問文に推量の Modalwort が使えないのと同様、vielleicht もここでは使えなくなるのではなからうか。そして例 19 e) のように後に副詞が入ると文が非文でなくなるのは、副詞に強調が置かれ vielleicht の意味が弱まると同時に、副詞によって文に制限が出来、以前に彼が来たという状況等を喚起する為、話者になんらかの形で事態を推量する事を許すからと考えられる。しかし、もし強い確信を抱いて推量しているのであれば、誰かに質問するという形はとれない。従っていわゆる推量の Modalwort である、*wahrscheinlich*, *vermutlich*, *offenbar* 等はここでは使えない。*wohl* については次章で扱う。

さて例 19 c) は非文であるが、否定文は成り立つ。その際 Modalwort の原則に合う nicht の位置をとる。

19. c) *Kommst du vielleicht?

19. f) Kommst du vielleicht nicht?

19. g) *Kommst du nicht vielleicht?

例 19 f) では、話者は来ないと仮定して質問しているのである。例 19 の auch、例 19 e) の noch あるいは bald と同様に nicht の方に重点が置かれている。

さて、話をもとにもどすと、例 19 は別として例 14 以下の nicht の位置は理論的には副詞と同様 vielleicht の前に来る。つまり例 14 ~ 例 20 の vielleicht はいわゆる推量の Modalwort とは意味が異なると同時に、統語論的にも Modalwort とは異なっている。しかしながら例 14 ~ 例 20 の文は nicht が入らないのが普通なので、次に Modalwort とは異なる nicht の位置をとる vielleicht の実例を二つあげておきたい。

26. Sagen Sie mal, könnten Sie nicht vielleicht ein Auge zudrücken?
(NHKラジオ, 7月, S.62)

27. Ich versuchte immer darüber nachzudenken, ob ich nicht vielleicht alles geträumt und den Traum einem erzählt habe, der jetzt die Stadt gegen mich aufhetzt und sich einen Witz mit mir macht. Dann wachte ich auf. (Brasch, S. 52)

これまでの事を簡単にまとめると、vielleicht は大きく分類して二つの用法に分けられる。一つは話者の推量・疑念を表わす場合で、ここにあげた五つの Modalwort の中では話者の確信度が最も低く、疑念が強い。めやすとしては事態が現実となる可能性を話者は半々とみていると考えられる。もう一つは語順と意味から考えて Modalwort ではなく副詞として扱われるべき用法である。しかし例 19 にも見られるように、はっきり分ける事が可能なかどうかという問題も残る。それについては、ここで触れなかった vielleicht のこれ以外の非難・皮肉・驚嘆などの意味の検討と共に今後の課題としたい。なお、vielleicht の反語的な用法について wohl との関連で次の二章で少し触れる。

2. wohl

前章から推察出来るように wohl は vielleicht よりも話者の確信の度合いが高い推量を表わす。しかし、Duden には „vermutlich, vielleicht; sicherlich“, 又 Wahrig には „wahrscheinlich, sicher, vermutlich“ と意味が説明されているように、推量の度合いは幅が広く、意味は非常に捉え難い。統語論的には他の Modalwort と異なる面を持ち、疑問文に用いられる点では vielleicht と共通する。wohl が疑問文に用いられる事と wohl が持つ意味とは深く関係していると考えられるので、まず疑問文から検討していきたい。

2.1. wohl と疑問文

前章で文の型が既にモダリティーの表現手段であり、例 14～例 20 の文型では話者が相手に何かを要求している為話者の強い仮定や推量を表わす Modalwort が使えず、vielleicht の位置に代入出来るのは eventuell だけであると述べた。しかし実は例 18～例 20 には wohl を代入する事が出来る。意味の変化を無視すれば wohl と vielleicht が相互に入れ換え可能な例を次にあげる。

28. Entschuldigung, könnten Sie mir vielleicht helfen? Ich möchte nach Ohshima. (NHKテレビ, 5月, S.42)

29. Können Sie mir vielleicht einen Kugelschreiber leihen?
(NHKラジオ, 7月, S.48)
30. Haben Sie wohl mal einen Kugelschreiber für mich? (NHKラジオ, 7月,
S.50)
31. Als er wieder mit mir tanzte, fragte er mich, ob er mich wohl nach
Hause begleiten dürfe. Ich sagte natürlich nein. (Brasch, S.89)
32. Als ich am Abend mit Großonkel Felix am Eßtisch saß, fragte ich
mich, ob wohl er mein Beichtvater gewesen war. Ich betrachtete
ihn prüfend, aber ich konnte nicht erkennen, ob er sich meiner
Sünden entsann. (Rinser, S.77)

上の例はそれぞれwohlを用いた場合とvielleichtを用いた場合とでは当然文の意味が異なる
と考えられる。前章で依頼文におけるvielleichtは丁寧の表現であると述べた。そこで例28
と例29のvielleichtをwohlで言い換えて両者をそれぞれ較べてみよう。

28. Entschuldigung, könnten Sie mir vielleicht helfen?
28. a) Entschuldigung, könnten Sie mir wohl helfen?
29. Können Sie mir vielleicht einen Kugelschreiber leihen?
29. a) Können Sie mir wohl einen Kugelschreiber leihen?

wohlを使った文は命令口調とまでは言えないにしても丁寧でない感じがする。この丁寧でない感
じは先の例30や例31にも存在する。vielleichtの代りにwohlを入れると丁寧さが消える
のは、wohlがvielleichtよりも話者の確信の強い推量を表わすからだと考えられる。そして確信
の強い推量を表わすにもかかわらずwohlが疑問文に用いられるのは、推量の質が他の推量のMo-
dalwortと異なるからではなからうか。Schulz/Griesbachは「肯定の答を予期している問」
にwohlが用いられるとして、"Er kommt morgen wohl?/Hast du wohl morgen Zeit?"
の例をあげている(注9)。肯定の答を予期するという事は推量している話者の確信度が高いと
いう事である。又丁寧さが失われるのも肯定の答を予期するからであろう。

ところで、例28や例29に否定詞nichtを用いる事は一般的ではないが、nichtを入れる事
は可能であると前章で述べた。しかしvielleichtをwohlと入れ換えた場合、つまり例28 a)
や例29 a)にはどこへもnichtを入れる事が出来ない。例28や例29で普通nichtが入らな
いのは、相手に依頼や要求をする場合、それが拒否という形で返って来る事はあっても、まず肯定
的な返答を前提として相手に尋ねるのが筋道だからという理由からであったが、wohlのはいった
依頼文でnichtが全く使えないのは、wohlが話者の確信度の高い推量を表わし、決定疑問文で
肯定の答を要求するからであろう。

ここで決定疑問文に用いられるModalwortとそうでないものを整理すると次のようになる。

19. d) *Kommt er vielleicht?

19. e) Kommt er vielleicht noch?

33. Kommt er wohl (noch) ?

34. *Kommt er offenbar (noch) ?

35. *Kommt er wahrscheinlich (noch) ?

36. *Kommt er vermutlich (noch) ?

疑問文が可能なのは wohl と後に副詞を伴った vielleicht だけである。この場合の非常に大雑把なそれぞれの意味は、vielleicht が丁寧を表わし、wohl が肯定の答を予期する、という事になる。

さて、これまでは決定疑問文と Modalwort との関係を見て来た。ここでいう決定疑問文とはいわゆる文のタイプとして用いられており、その用法は質問、勧誘、依頼等様々あり、相手に何かを要求するモダリティーの表現形式であった。次に補足疑問文と Modalwort との関係を見て行こう。疑問詞で始まる疑問文は、話者が未知の事柄について知識を得る為に疑問詞を用いて直接相手に尋ねるものである。それ故推量の Modalwort とは両立しない。しかし wohl だけは補足疑問文に現われる。

37. a) Wo hat er wohl studiert?

b) *Wo hat er vielleicht studiert?

c) *Wo hat er offenbar studiert?

d) *Wo hat er wahrscheinlich studiert?

e) *Wo hat er vermutlich studiert?

依頼や勧誘の表現にもなる決定疑問文と異なり、補足疑問文では vielleicht を使う事が出来ない。それでは補足疑問文中の wohl はどのような働きをしているのだろうか。まず wohl の入らない例と較べてみよう。

37. a) Wo hat er wohl studiert?

f) Wo hat er studiert?

例 37 a) の wohl を伴った文は、直接相手に答を求めて質問しているというよりは、話者が自分自身に向かって問を発しているように感じられる。そこで先にあげた例 32 を見てみよう。

32. Als ich am Abend mit Großonkel Felix am EBtisch saß, fragte ich mich, ob wohl er mein Beichtvater gewesen war. Ich betrachtete ihn prüfend, aber ich konnte nicht erkennen, ob er sich meiner Sünden entsann.

大伯父が司祭として在職している修道院に母親と共に戦争中身を寄せていた十才の少女（主人公）が、復活祭前のある日宗教の時間に他の子供達と共に教会で告解をする、というのが例 32 に先行する話の内容である。その日の夕食の卓で話者は自分の聴罪師が大伯父だったのかどうか知りたいのだが、直接大伯父に質問する事はしない。探るように大伯父を観察するだけであり、ob 以下の疑問は話者が自分自身に発しているのである。主文の *fragte ich mich* がそれを表わしている。その自問の内容である疑問文中に推量を表わす *wohl* が用いられている。推量する事と相手に答を要求する事が両立しないと、*wohl* がかなり強い推量を表わす事から、*wohl* を伴った補足疑問文は、直接相手に答を求める質問ではなく話者の自問を表わしているのではなかろうか。そこで次に補足疑問文の中に現われる *wohl* の例を見てみよう。

38. *Habt ihr das gehört? Wo hat er das wohl gelernt, an der Universität. Wir sollen ihn in Ruhe lassen, hat er gesagt.* (Brasch, S.103)
39. *Was ging in seinem Kopf wohl vor?* (Coulmas, S.16)
40. *Jedoch, wie kam es wohl, daß Kichijiro mit solcher Schnelligkeit Christen aufgespürt hatte?* (Endo, S.36)
41. *Später hat meine Mutter gefragt: „Was ist wohl aus dem Vogel geworden?“ Da mußte ich weinen.* (Michels, S.11)

例 38～例 40 は相手に答を要求している場面ではなく明らかに話者の自問である。

例 38 は、飲み屋で話者がザクセン出身とみた兵隊に絡む場面である。「方言でも試験してやれ」というのに対し兵隊が「ほっといて下さい、邪魔しないで下さい」と標準語で応答する。それを聞いて話者が飲み屋にいた他の連中に向かって言うのがこの台詞である。「みんな聞いたか、大学の何処で覚えたものやら」とでも訳したらよいだろうか。wo 以下は、*Wo er das wohl auf der Universität gelernt hat?* に書き改めると理解しやすい。

例 39 は、ドイツ人である著者の日本での体験談で、背後から駅員に話しかけたら相手は日本語で答えかけたのに、振り向いて相手が外人であるとわかった途端に言葉を失ってしまった。一体彼の頭はどうなっているんだろう、というやはり話者の自問である。これは随筆の中の一文であるから勿論対話の相手は登場せず、明らかに自問である。

例 40 も話者の自問である。書簡形式の小説で、しかも往復書簡ではなく一方的に書き送る手紙であるから、形の上では受信者はいるはずだが、作品中には登場せず従って対話の相手はいない。

例 41 のみが直接相手に尋ねる形をとっている。しかし *wohl* がない文と較べるとやはり話者の推量と半分自分に問うている気持が感じられる。

上の例から、補足疑問文に於ける *wohl* は話者の自問を表わすと考えられる。ところで、相手に答を要求する疑問と話者の推量とが両立しないのはドイツ語に限った事ではない。「ヨウダ、ラシ

イ、ダロウ」の比較考察の中で柴田は、疑問詞または疑問イントネーションを持つ文ではダロウしか使えない事を指摘している(注10)。その理由として、「ダロウは<推量の客観的根拠がきわめて薄弱>でありかつ<推量される事態が不確実>である」事、又「疑問詞または疑問イントネーションを持つ文では<客観的根拠がきわめて薄弱>である」事をあげている。疑問詞で始まる疑問文は当然推量される事態が不確実である。この疑問文に wohl が用いられるという事は、ダロウと同様 wohl の推量の客観的根拠がきわめて薄弱なのではなからうか。ところで柴田があげている日本語の例、「一体何を言ってるんだロウ」、「あしたも雪ダロウか」は直感的に判断して、相手に答を要求している質問ではなく、ドイツ語の wohl 同様自問である。

2.2. wohl の特異性

wohl の意味を考える上でやはり重要と思われるので、wohl の意味に入る前に wohl が他の Modalwort と統語論的に異なる点を二つ指摘しておきたい。その前に推量を表わす wohl が Modalwort である事の証明として、否定詞 nicht が wohl の後に来る事を例をあげて確認しておこう。wohl は副詞で使われる場合と Modalwort の場合と用法が二通りあり、それぞれ nicht の位置が異なる。

42. Ich fühle mich heute nicht ganz wohl. (Wahrig)

* Ich fühle mich heute ganz wohl nicht.

43. Ist dir nicht wohl? (Wahrig)

44. Du glaubst es wohl nicht. (Brasch, S.16)

* Du glaubst es nicht wohl.

45. Ihr habt das Bein wohl nicht gesehen, als ihr reingekommen seid, oder. (Brasch, S.105)

例 42 と例 43 は「気分が良い」という意味の副詞であり、nicht は wohl の前に来ている。例 44 と例 45 は推量を表わす Modalwort で nicht は wohl の後ろにある。

Modalwort のこの他の特徴の一つとして、Brinkmann は Modalwort (Brinkmann では Modaladverb) が否定詞と同様に文の一構成要素を修飾出来る事、特に同一文型が基礎になっている付加語を修飾出来る事をあげている(注11)。

46. ..., war er überall senkrecht, durchtrainiert, überflüssig. Auf der tiefbraunen Brust hatte er nur ein paar goldblonde Haare, aber auf dem Kopf einen dicht und hoch lodernnden Blondschoopf. Wahrscheinlich ein ehemaliger Schüler, dachte Helmut. (Walser, S.19)

例 46 に wohl を代入可能な事や例 47 にみられるように、wohl もこの特徴を具えている。

46. a) Wohl ein ehemaliger Schüler, dachte Helmut.

47. Er haßte mich wie die Pest, er haßte überhaupt alle Menschen wie die Pest. Wohl mit Recht, als Wirtschaftsführer taten sich ihm menschliche Abgründe auf, die uns Psychiatern auf ewig verschlossen sind. (Dürrenmatt, S.20)

さて、wohl が他の Modalwort と異なる点に進もう。その一つは、これまで度々触れたように wohl が文頭に立てない事である。冒頭にここで扱う Modalwort の例を一つずつ例1～例5まであげたが、いずれも文中にあるものばかりを選んだ。それは語順を変えずにすべての Modalwort が代入可能である為である。しかし実際には例48～例51のように Modalwort は文頭に来る場合が多い。

48. Vielleicht sehnte er sich nur, um enttäuscht werden zu können.
(Walser, S.11)

48. a) *Wohl sehnte er sich nur, um enttäuscht werden zu können.

48. b) Er sehnte sich wohl nur, um enttäuscht werden zu können.

49. Vermutlich sparte das Feuer unser Schmuckzimmer solange aus, weil Simon Gayko- ... (Lenz, S.7)

50. Offenbar richtet es sich auch nach den Konventionen der Gesellschaft, ... (Coulmas, S.22)

51. Wahrscheinlich hast du, ohne es zu bemerken, in diesem Augenblick ganz genau das gleiche abschüssige Lächeln im Gesicht. (Walser, S.17)

例49～例51も wohl を用いる時は例48b)のように語順を入れ換えなければならない。又、次の例52で wahrscheinlich, vermutlich, offenbar, vielleicht を用いる場合は、例52a)のようにこれらを文頭に置くべきだとインフォーマントは言う。

52. Nur in wenigen anderen Fällen ist wohl eine Sprache so sehr von einer anderen beeinflusst worden, dadurch, daß deren Schriftsystem übernommen wurde. (Coulmas, S.12)

52. a) Wahrscheinlich ist nur in wenigen anderen Fällen eine Sprache so sehr von einer anderen beeinflusst worden, ...

更に次の例53のように文が省略されて Modalwort が他の副詞と共に用いられる場合も、wohl だけは文頭に立てず副詞の後に来る。

53. Helmut sagte: Nein, wirklich nicht. Im Augenblick nicht. Viel-

leicht nachher. (Walser, S.135)

53. a) Wahrscheinlich nachher.

b) Vermutlich nachher.

c) *Wohl nachher.

d) Nachher wohl.

wohl が他の Modalwort と異なるもう一つの点は単独で使えない事である。これは wohl が文頭に立てない事とも関係すると思われる。例 54 の vielleicht の所には、話者の確信の度合いや推量の根拠の違いによって wahrscheinlich, vermutlich, offenbar を代入する事が出来る。wohl を用いる事も可能であるが、その場合 wohl は例 54 a) のように単独では立てず、例 54 b) のような文の形にしなければならない。

54. -Du hast Sehnsucht nach einem Abenteuer. Das du dir ungeheuer reizvoll und farbig vorstellst, weil du es nicht erlebt hast.

-Vielleicht. (Schneider, S.20)

54. a) -Wahrscheinlich./-Vermutlich./-Offenbar./-*Wohl.

54. b) - Es ist wohl so.

どの文法書も Modalwort の特徴にその文的機能をあげている。そして Modalwort を他の副詞と区別する基準として、Modalwort が決定疑問文の答となり得る事を指摘している(注12)。たとえば Brinkmann によれば、「Modaladverb は話者の態度を表わすので、コミュニケーションの中で ja や nein のように答として文の代理をする事が出来る(注13)」という。そして彼は「Wird er kommen? - Sicher (vielleicht, hoffentlich).」の例をあげている。又 Helbig/Buscha は、Modalwort, 副詞、不変化詞の三つを区別する上でのいわば基準として次の事を指摘している。Modalwort は決定疑問文の答となり、副詞は補足疑問文の答となるが不変化詞はいずれの答にもなれない。Helbig/Buscha の例を借りると「Kommt er heute? - Vermutlich./*Spät./*Nur.», 「Wann kommt er heute?-Spät./*Vermutlich./*Nur.(注14)」という事になる。集まった手元の用例の中には残念ながら、決定疑問文に対する答として用いられている Modalwort で推量を表わすものの例はない。しかし先の例 54 にみられるような文の代理とも言える単独の用法は wohl を除けば他にもみられる。wohl の ja や nein に相当する使い方については、Wahrig に上部ドイツ方言で wohl が ja や gewiß の意味で使われるとあるから、wohl が単独で用いられる事もあるのかもしれないが例はみつからなかった。又、方言は一応対象から外してよいと考える。

さて、wohl が文頭に立てない事と例 54 a) のように文の代りに単独で立つ事が出来ず例 54 b) のように文の形にしなければならない事から、wohl は他の Modalwort に較べて文全体を支

配する力が弱く、文の構成要素との結びつきが強いのではないだろうか。そしてこの事と、wohl が他のModalwortにはないような慣用的表現に用いられる事とは何らかの関係があるように思う。

次の例 55 ～例 57 はほとんど固定化した言い回しである。

55. Was ist los, sagte Robert, du spinnst wohl. (Brasch, S.52)
56. Klaus Buch fluchte. Der spinnst wohl, schrie er. Den Wind meine er.
(Walser, S.115)
57. -Aha, da hat er also einen guten Eindruck auf dich gemacht.
-Das kann man wohl sagen (NHK ラジオ, 8月, S.24)

例 55 と例 56 は俗語表現で、「頭がどうかしている」という意味である。このような意味を持つ文では、話者が事態を現実とみなしている可能性の高い推量の Modalwort は使えない。実際、ここで入れ換えが可能なのは vielleicht だけである。

56. a) Der spinnst wohl.
56. b) Der spinnst (ja) vielleicht.

vielleicht を用いる場合はその前に ja が来る事が多く、意味は wohl より強くなる。wohl を用いた表現の方が一般的でいわば決まった言い回しである。東独版の現代独語辞典 (注 15) には、wohl が wahrscheinlich, anscheinend, vermutlich の意味で用いられる時は、wohl にアクセントが置かれなるとあるから、wohl の持つ推量の意味そのものも文中では強調されなくなると思う。ところで、ここに vielleicht を用いた場合は逆に話者の確信の度合いが強くなる。例 56 b) は Der spinnst ganz bestimmt. の意味で用いられ、この bestimmt を用いた表現は文法的には正しいが決して使われない、というのがインフォーマントの意見である。非常に疑念の強い vielleicht が話者の強い確信に用いられている訳で、vielleicht のこのような用法は文自体が持つ意味と深く関係していると思われる。即ち文自体あるいは文脈の中に内容的に否定的な要素が含まれている場合に、vielleicht に反語的な意味が出てくると考えられる。Schulz/Griesbach は「感嘆・驚きを予期して (反語的にも)」 vielleicht が使われるとして „Der Mann hat vielleicht gearbeitet! / Wir haben im letzten Winter vielleicht gefroren! / Sie haben vielleicht komische Ansichten!“ 等の例をあげているが (注 16)、これらも文脈あるいは文の中に内容的に否定的な要素が含まれている。

さて、先の例 57 は内容に否定的な要素がなく、従って vielleicht を用いると非常に主張が弱くなる。又ここでは、話者の心的態度によって wahrscheinlich や offenbar も使う事が出来る。しかし vermutlich は使えない。

57. a) Das kann man wohl sagen.
57. b) Das kann man vielleicht sagen.

57. c) Das kann man wahrscheinlich sagen.

57. d) Das kann man offenbar sagen.

57. e) * Das kann man vermutlich sagen.

例 57 a) ~ 例 57 d) のうち最初の wohl を用いた表現が言い回しとしてよく使われる。東独版の現代独語辞典では wohl のこのような用法を、本来の意味を失い不変化詞的に用いられ確認あるいは断言を表わすもの、と説明している。不変化詞は文全体を支配する力はなく、又文の一構成要素としての性質を持たない。常に文の一成分と強く結びついており、それ故独立して文頭に立つ事、つまり不変化詞のみで定動詞の前に来る事は出来ない。wohl が文頭に立っていない事は述べたが、wohl は不変化詞ではないので副詞や形容詞を修飾する事はなく、逆に不変化詞 sehr で修飾される。ついでに述べると sehr によって修飾される Modalwort は wohl と wahrscheinlich だけである。さて、例 57 b) ~ 例 57 d) のように wohl 以外の Modalwort を用いた場合は、話者の推量の程度や推量の根拠が前面におし出される事になる。

以上が wohl の他の Modalwort と異なる点である。

2.3. wohl の意味

この章の最初に述べたように wohl の持つ推量の意味の幅は広い。疑問詞で始まる補足疑問文に用いられる事から、話者が推量する際拠所と出来るような客観的裏づけを全く必要としないものと考えられる。例 58 及び例 58 a) のように文脈によって話者の確信の度合いが変わるのもその為と思われる。例 58 の wohl は強い確信あるいは強調の表現である。

58. Die Hauptsache ist doch wohl, daß es Spaß macht. (NHK ラジオ, 8月 S.66)

しかしこの文を否定文に変えると wohl は話者の仮定・推量を表わす。

58. a) Die Hauptsache ist doch wohl nicht, daß es Spaß macht.

では次に、他の Modalwort との代入テストにより wohl の意味を検討していこう。

例 59 は wahrscheinlich, vermutlich を代入出来ない wohl である。

59. Ach so, schrie der Alte, Ruinen sind wohl schöner, Frieren ist wohl besser. (Brasch, S.17)

例 59 に vielleicht は代入出来るが、これは前節で述べた否定的要素を含んだ文に用いられる反語的使い方である。wahrscheinlich や vermutlich が使えないのは、一章の例 16 でみたように話者が何らかの客観的根拠を持ってかなりの確信を抱いて事態を単純に推量する場合にこれらを用いるからであると考えられる。例 59 は事態を単純に推量しているのではなく話者の気持が入っている。wohl にアクセントの置かれる文の強調表現である。wohl にこのような用法が可能なの

は、客観的根拠を必要としない話者の勝手な推量を表わすからではなからうか。

次の例 60 は wohl あるいは offensichtlich が代入可能で、wahrscheinlich, vermutlich, vielleicht の使えないものである。

60. Bevor Klaus Buch, der jetzt offenbar soweit war, über alles ins Lachen verfallen zu können, wieder loslachte, sagte Hel: Pscht.
(Walser, S.84)

例 60 の offenbar は、外見的状况から判断して相手の行為が明らかにそうなるように見える事、それには疑う余地がほとんどない事を表わしている。このような場合に公算大な話者の推量を表わす wahrscheinlich や vermutlich が使えないのは、逆に推量の意味が強すぎて offenbar に較べると疑念が強すぎる為であろう。wohl が使えるのは、これが客観的根拠をもとにした公算大の推量を表わすのではなく、話者の独断的な推量を表わす為ではないかと考える。wohl が例 58 のように話者の強い確信や強調を表わしたり、例 59 のように反語的な意味に使われるのも上の理由によると思われる。

次の例 61 は offenbar を代入出来ないが他の Modalwort は入れ換えが可能である。

61. - ... Es ist besser, daß du jedem zuhören kannst.
-Vielleicht werde ich es lernen.
-Du wirst es lernen. (Schneider, S.36)

- 61. a) Vielleicht werde ich es lernen.
- 61. b) Vermutlich werde ich es lernen.
- 61. c) Wahrscheinlich werde ich es lernen.
- 61. d) Ich werde es wohl lernen müssen.

例 61 b) と例 61 c) はほとんど意味が同じで、一般的なのは例 61 c) の wahrscheinlich の方である。インフォーマントによると wohl を用いる時は例 61 d) のような必然の話法の助動詞等を伴った言い方が普通であるという。例 61 d) は「恐らくそれを学ばなければならないだろう」という話者の認識あるいは事態に対する理解を表わしている。wohl が例 61 b) や例 61 c) のように自分の意図的行為の推量に使われずに、例 61 d) のような自分の行為の必然性の認識に用いられるのは何故だろうか。例 61 の「学ぶ」という行為の主体は話者であり、さらに話者は werden を用いる事によってこの行為が未来に起る事を表現すると同時に自分がこの行為を意図している事も表現している。自分の意図的行為を公算大と推量する時には、話者は何らかの客観的根拠を持っているはずであり、その根拠をもとにその行為が将来実行出来るか否かを考慮に入れて推量すると考えられる。しかし根拠のない推量と意図的行為とは矛盾すると考えられるから、wohl を客観的根拠を持たない推量と考えるなら、意図の意味を含む未来の助動詞 werden と wohl は両

立しない事になる。しかし例 61 d) のように必然を表わす話法の助動詞が入ると werden は意図の意味を持たなくなり推量を表わすようになる。そこで wohl が入る事も可能になると考えられる。

最後の例 62 はインフォーマントによると wahrscheinlich, vermutlich, offenbar は使えても wohl の使えないものである。

62. Für manche Ausländer sind solche Erklärungen vielleicht bequeme Ausreden für ihre Faulheit, die sie der in der Tat beträchtlichen Mühe entheben, Japanisch zu lernen. (Coulmas, S.5)

wohl が使えないのは日常会話的という理由もあるだろうが、例 62 の文に wohl を使うと意味が明らかでなくなり、その為逆に強すぎる感じがするとインフォーマントは言う。これはやはり wohl が客観的根拠を持たない推量を表わす事から来ると思う。

以上、wohl は客観的根拠を持たない話者の憶測を表わし、文脈によって意味が変わる。肯定文では確信や強調を表わす事があり、wohl にアクセントが置かれない場合は推量を表わす。決定疑問文では肯定の答を期待し、補足疑問文では話者の自問を表わす。

3. offenbar

offenbar は Modalwort の特徴、即ち疑問文に用いられない (例 34 及び例 37 c))、nicht で否定されないので nicht は Modalwort の後に来る (例 63)、文の代理をする (例 64) 等の特徴を具えているので、これについては以下に例を列挙するにとどめたい。

34. *Kommt er offenbar (noch) ?

37. c) *Wo hat er offenbar studiert?

63. Ich habe es oft erlebt, daß Japaner, mit denen ich am Telefonsprach, irritiert waren, weil ich offenbar nicht häufig genug *hai, hai, ē, ē, ē*, oder *sō desu ne* sagte, während sie sprachen. (Coulmas, S.26)

64. Möbius: Ich mußte die Wahrheit sagen.

Schwester Monika: Offenbar. (Dürrenmatt, S.37)

3.1. offenbar の意味

offenbar は Helbig/Buscha がはっきり分る外見的な事実を根拠とする話者の推量と定義している事と、文を客観的な事柄を表わす部分と話者の主観的態度を表わす部分に分けると「Es offenbart sich, daß ... (… の事が明らかになる)」と書き換えられる事から推察される

ように、非常に強い確信を持つ話者の推量を表わす。しかし、この *offenbar* の語感についてはインフォーマントにより異なり、傾向としては上の書き換えて話者が「～が明らかになる（現われる）」と断言するほど *offenbar*（明らかな）ものではなく、実は常に幾分かの話者の *Zweifel*（疑念）を表わしているという見方が強い。つまり、Helbig/Buscha は *offenbar* を *Vermutung*（推量）に他の四つを *Zweifel*（疑念）に分類したが、程度の差こそあれ、*offenbar* も話者の疑念を表わすという点では他の四つと共通である。

例 65 では、*offenbar* を「明白だ」と解釈するインフォーマントは *offenbar* しか使えないという意見であり、「話者の疑いを表わす」とみるインフォーマントは *wohl*、*wahrscheinlich*、*vermutlich* が代入可能だと言う。但し、その際勿論意味は変わって来る。

65. Helmut schaute offenbar so, daß Klaus Buch nicht auf der Antwort bestand. Oder anders gefragt, sagte er, bist du ganz sicher, daß du deine Frau noch liebst? (Walser, S.108)

一章で扱った例 12 についても、*offenbar* を「*sich offenbaren*」と解釈する人は *wahrscheinlich* のところに *offenbar* を代入出来ないと言い、「話者の疑念」ととる人は *offenbar* も *vermutlich* や *wohl* 同様使えると言う。

12. Er hatte wahrscheinlich kein schlechteres Gedächtnis als andere.
Auch zogen ihn Jugend und Kindheit in der bekannten Weise an.
(Walser, S.29)

例 66 の *offensichtlich* も、「明らかにはっきり見てとれる」からその他は使えないという意見と、明らかである事を強調したい場合は他は使えないが、軽い疑念を表わすと解釈すると *offenbar* や *wahrscheinlich* を代入する事が出来るという意見がある。どちらに解釈するかは本全体の内容あるいはもっと長い文脈から決められる事で、このような短い文を抜き出した場合はどちらにも解釈が可能である、と言う。

66. Und sie vergißt den Wald und versucht sofort, der offensichtlich schwachen Position ihres Mannes zu Hilfe zu kommen. (Walser, S.86)

offensichtlich は *offenbar* と意味がほとんど同じと考えられるので参考までにとりあげるのが、*offenbar* と用法を比較出来る程例は集まらなかった。わずかの例から判断すると *offensichtlich* の方が *offenbar* よりも話者の確信が強い感じがする。いずれにせよ *offenbar* や *offensichtlich* は、単に「明らかに」という意味なのではなく話者の軽い疑念を含んでいる、と考えられる。それは、話者がある事柄を単なる事実として表現していない所に、つまり *offenbar* や *offensichtlich* を用いて事柄がある外見的事実に基づいた推量であると表現している所に、

話者の軽い疑いが表現されると解釈出来るからである。

例 67 も offensichtlich の例で、話者の軽い疑念を表わしており、多少反語的なニュアンスを含んでいると思われる。

67. F.H.: ...Um eine neue Rollbahn bauen zu können, müßte nämlich ein großes Stück Wald abgeholzt werden.

H.S.: Ist der Flughafen denn zu klein?

H.H.: Ja, offensichtlich. (NHKラジオ, 9月, S.50)

例 67 では、話者は「空港が小さすぎるだろう」という自己の視点に立った推量を表わしているのではなく、「空港を拡張する計画から判断すると空港は小さすぎるらしい」という他人の視点を推量している。このような場合には、offenbar は使えても wahrscheinlich は使えない。インフォーマントによれば vermutlich は使えるかもしれないがはっきり断定は出来ないと言う。これは vermutlich の本来持っている「推測」の意味が使えるような可能性を与えるのだと思う。

さて、以下は offenbar の使えない例である。

68. Vielleicht ist dann besseres Wetter. (Schneider, S.37)

68. a) Wahrscheinlich ist dann besseres Wetter.

68. b) Vermutlich ist dann besseres Wetter.

68. c) Dann ist wohl besseres Wetter.

68. d) * Offenbar ist dann besseres Wetter.

例 68 は未来に起る事柄を推量しており、それが事実であり得る根拠を与えるような外見的事実は現時点では存在しない。offenbar が使えないのはその為と考えられ、それは例 68 を過去形にすると offenbar が使える事からも言える。

68. e) Offenbar war dann besseres Wetter.

例 69 のように未来の自分の行為を言う場合にも wahrscheinlich, vermutlich, wohl は使えるが offenbar は使えない。二章の例 61 も同様である。

69. Vielleicht trink ich noch einen und gehe dann zu der Stelle.
(Brasch, S.11)

69. a) * Offenbar trink ich noch einen und gehe dann zu der Stelle.

61. a) Vielleicht werde ich es lernen.

61. e) * Offenbar werde ich es lernen.

例 69 a) や例 61 e) も、例 68 d) と同様に現時点で外見的事実が成立しない為 offenbar が使えないと考えられる。話者自身に関する事柄であっても過去の場合は事実が存在し、話者は他人を通して自分の行為に関する他人の視点を推量出来るから、offenbar が使える事になる。例

63はその例である。

63. Ich habe es oft erlebt, daß Japaner, mit denen ich am Telefon sprach, irritiert waren, weil ich offenbar nicht häufig genug *hai, hai, ě, ě, ě*, oder *sō desu ne* sagte, während sie sprachen. (Coulmas, S. 26)

例70～例74のように目前にしている相手に向かって相手の考えや気持を推量して言う場合も *offenbar* は使えない。 *wahrscheinlich*, *vermutlich*, *wohl*, *vielleicht* はいずれも代入可能である。

70. „... Die Kette wird dir wohl lieber sein als dieses Blatt“, fügte er lächelnd hinzu. (Rinser, S.106)
71. Du glaubst es wohl nicht. Aber es ist so. (Brasch, S.16)
72. Ihr denkt wohl, ich mache die Puffmutter, was? (Brasch, S.45)
73. Du wirst vielleicht denken, einem Fremden tischt er gleich intime Geschichten auf. (Brasch, S.41)
74. „Vielleicht wirst du einmal das Thema für deine Diplomarbeit im japanischen Bereich finden,“ meinte der Vater. „Wahrscheinlich hast du recht“, nickte Hans dem Vater zu. (Kawashima/Hioki, S.35)

又、例75のようにある客観的根拠をもとに話者が推論する場合も *offenbar* は使えない。

75. Wenn das Wetter schön ist, geht er meistens um diese Zeit spazieren. Er ist wahrscheinlich nicht zu Haus.

以上 *offenbar* は話者が外見の事実を推量の根拠にしているのだという事を表わす。それ故根拠となる事実が成立しないような状況、例えば未来の出来事、相手の気持や考え等には *offenbar* は使えない。 *offenbar* はここで扱う五つの Modalwort の中では話者の確信度の最も高い推量を表わす。推量しているという事は疑念を抱いているという事でもあるが、五つの Modalwort の中では最も軽い疑念を表わす。

4. *vermutlich* と *wahrscheinlich*

vermutlich と *wahrscheinlich* は典型的な推量の Modalwort と言う事が出来、一章～三章で Modalwort の特徴を述べる際に例として取り上げたので繰り返す必要はないかもしれないが、整理と確認の意味でもう一度 Modalwort の特徴を *vermutlich*, *wahrscheinlich* の例であげよう。否定詞 *nicht* は Modalwort の後に来る (例23、例76)。文の代理の働きをする (例

77、例 78)。疑問文に使えない(例 35、例 36、例 37 d)、例 37 e)。

23. Ein paar hundert Leute würden wahrscheinlich nicht so denken und fühlen und handeln, wie sie es tun, wären sie mir nicht über den Weg gelaufen. (Schneider, S.31)

76. Viele neue Wörter wären vermutlich nicht oder anders gebildet worden, wenn nicht mit den Kanji eine große Menge chinesischer Fremdwörter ins Japanische importiert worden wäre. (Coulmas, S.12)

77. Aber die deutschen Städte sind alle nichts gegen Spanien. Wahrscheinlich, sagte Robert. (Brasch, S.54)

78. Kommt er heute? Vermutlich. (Helbig/Buscha, S.429)

35. *Kommt er wahrscheinlich (noch)?

36. *Kommt er vermutlich (noch)?

37. d) *Wo hat er wahrscheinlich studiert?

37. e) *Wo hat er vermutlich studiert?

4.1. vermutlich と wahrscheinlich の意味

一章の例 6 以下でみたように、話者が信じていない事柄や事態の可能性が非常に低い場合には vermutlich や wahrscheinlich は使えず、vermutlich と wahrscheinlich は vielleicht に較べて事態に対する話者の確信度ははるかに高い。

6. Vielleicht lassen sie mich ans Telefon, vielleicht nicht.

6. a) * Vermutlich/Wahrscheinlich lassen sie mich ans Telefon, vermutlich/wahrscheinlich nicht.

7. Vielleicht habe Helmut sogar schon resigniert. Er, Klaus Buch, glaube das nicht.

7. a) * Vermutlich/Wahrscheinlich habe Helmut sogar schon resigniert. Er, Klaus Buch, glaube das nicht.

9. Höchstens eine Muschelschale, ein winziges Farnblatt, vielleicht eine Blüte oder vielleicht...

9. a) * Höchstens eine Muschelschale, ein winziges Farnblatt, vermutlich/wahrscheinlich eine Blüte oder vermutlich/wahrscheinlich...

wahrscheinlich と vermutlich は話者が何らかの客観的根拠をもとに推測したり推量する場合に用いると考えられる。事態を目前にし、「明らかにそのように見てとれる」例 60 のよう

な場合には、wahrscheinlich や vermutlich は使えない。従って offenbar に較べると話者の確信が弱く、疑念が強い。

60. Bevor Klaus Buch, der jetzt offenbar soweit war, über alles ins Lachen verfallen zu können, wieder loslachte, sagte Hel: Pscht.

60. a) *Bevor Klaus Buch, der jetzt vermutlich/wahrscheinlich soweit war, über alles ins Lachen verfallen zu können, wieder loslachte, sagte Hel: Pscht.

wohl との比較では、wohl が文脈によって意味が変わるので wahrscheinlich 及び vermutlich との確信度の相違は明らかではない。しかし wohl が疑問詞で始まる疑問文に用いられる、即ち推量される事態が不明の場合の推量にも用いられるのに対し、wahrscheinlich や vermutlich の場合には推量される事態は常にはっきりしている。又 vielleicht や wohl のように不変詞的な日常語としての用法がなく、意味の点でも wahrscheinlich と vermutlich は推量の Modalwort の典型といえる。

一章の例 16 を平叙文に直すと wahrscheinlich と vermutlich が使える事から、wahrscheinlich と vermutlich は、話者が何らかの客観的根拠を持って推量する場合に用いられると思われる。

16. Wissen Sie vielleicht auch, von welchem Bahnsteig der Zug abfährt?

16. a) Sie wissen vermutlich/wahrscheinlich auch, von welchem Bahnsteig der Zug abfährt.

例 16 a) は、話者が教えてもらえるだろうと判断した相手、たとえば駅員等に尋ねる場合に使える表現である。類例をあげると、一章例 18、二章例 28、例 29 等も平叙文に直すと wahrscheinlich と vermutlich が使える。

18. Kann ich vielleicht auch mitkommen?

18. a) Ich kann vermutlich/wahrscheinlich auch mitkommen.

例 18 a) は、たとえば誰かが学生を招待するという状況ならば、学生の一人が言える表現である。

28. Entschuldigung, könnten Sie mir vielleicht helfen? Ich möchte nach Ohshima.

28. b) Entschuldigung, Sie können mir vermutlich/wahrscheinlich helfen. Ich möchte nach Ohshima.

例 28 b) は例 16 a) と同様、話者が相手をその方面に通じた人とみなした場合に用いる表現であり、例 16 a) と同じく駅員に対して使う事が出来る。

29. Können Sie mir vielleicht einen Kugelschreiber leihen?

29. b) Sie können mir vermutlich/wahrscheinlich einen Kugelschreiber leihen (, weil da so viele liegen) .

例 29 b) のような表現が使えるのは、話者が目の前にたくさん置いてあるボールペンを見て、それを根拠に推量するような場合である。

さて、wahrscheinlichとvermutlich はだいたい同程度の話者の確信あるいは疑念を表わすものと思われ、実例はたくさん見つかったもののほとんどの場合代入可能であり、又不可能な場合も明確な理由がみつからず、両者の区別を見出すのは困難であった。話者の確信の度合の差異は分からないが、wahrscheinlichとvermutlich の用法の違いは、それぞれが持つ本来の意味から来ると考えられる。次に一方が使えて他方が使えない例をあげよう。例 79 では vermutlich だけが使えない。

79. Er genierte sich für Sabines Lächeln. Er berührte sie am Oberarm.
Wahrscheinlich sollte man reden miteinander. Ein alt werdendes Paar, das stumm auf Caféstühlen sitzt und der lebendigen Promnade zuschaut, sieht komisch aus. (Walser, S.12)

79. a) * Vermutlich sollte man reden miteinander. Ein alt werdendes Paar,, sieht komisch aus.

例 79 は話者自身に関する事を推量しているが、例 80 のような話者の意志に関わるような事も vermutlich を用いると不自然な感じがする。

80. -Was möchtest du eigentlich studieren, Michael?
-Das weiß ich noch nicht genau. Vielleicht Physik und Mathematik oder Physik und Chemie. (NHKラジオ, 5月, S.6)

80. a) -Das weiß ich noch nicht genau. Wahrscheinlich Physik und Mathematik oder Physik und Chemie.

80. b) *-Das weiß ich noch nicht genau. Vermutlich Physik und Mathematik oder Physik und Chemie.

例 80 a) のように wahrscheinlich を用いるとかなり可能性が高い感じがする。三章で述べたが offenbar は話者の未来の行為には使えない。 wohl を用いると不確かさと、「したくないけどしなきゃならないだろう」という話者の不快な気持が表現されるとインフォーマントは言う。例 79 と例 80 で vermutlich が使えない理由は、vermutlich (= ich vermute, daß...) が持つ「憶測」という意味にあると思う。二章の例 57 でも vermutlich だけが代入不可能であったが、これも vermutlich の持つ「憶測する」という意味がこの文脈ではぴったりしない為と考えられる。

57. e) * Das kann man vermutlich sagen.

逆に、一章例 8 や三章例 67 で vermutlich が使用可能性を帯びてくるのも、やはり vermutlich の持つ「憶測」という意味のせいではないだろうか。

8. Vielleicht ist Sabine imstande, dieses Leute betrachten zu genießen. Er glaubte das nicht. Dann müßte sie ganz anders sein als er. Ist sie aber nicht.

8. a) * Wahrscheinlich ist Sabine imstande, dieses Leute betrachten zu genießen. Er glaubte das nicht. Dann müßte sie ganz anders sein als er. Ist sie aber nicht.

8. b) ? Vermutlich ist Sabine imstande, dieses Leute betrachten zu genießen. Er glaubte das nicht. Dann müßte sie ganz anders sein als er. Ist sie aber nicht.

67. F.H.: ... Um eine neue Rollbahn bauen zu können, müßte nämlich ein großes Stück Wald abgeholzt werden.

H.S.: Ist der Flughafen denn zu klein?

H.H.: Ja, offensichtlich.

67. a) * Ja, wahrscheinlich.

67. b) ? Ja, vermutlich.

wahrscheinlich と vermutlich の違いは、「状況から判断するとそうみえる」か、「状況から判断して憶測する」かの相違と考えられ、話者の確信の度合いという点ではあまり差がないように思われる。

最後にもう一つだけ wahrscheinlich と vermutlich の違いをつけ加えれば、wahrscheinlich は sehr で修飾されるが、vermutlich は修飾されない。これも、それぞれが持つ本来の意味と関連していると考えられる。

81. ;oft gibt es für den Sprecher keine positiven Aspekte, für den Angesprochenen aber sehr wohl negative - (Coulmas, S.23)

81. a) sehr wahrscheinlich

81. b) * sehr vermutlich/sehr offenbar/sehr vielleicht

5. ま と め

vielleicht は、話者が事態の可能性を半々あるいはそれ以下と見て仮定する場合に用い、話

者の非常に強い疑念を表わす。wohl は、客観的根拠を特に必要としない話者の勝手な推量を表わすと考えられ、推量される事態そのものが不確かな補足疑問文にも用いられる。vermutlich と wahrscheinlich は、話者自身に納得のゆくなんらかの客観的根拠がある場合の推量に用いられ、vielleicht よりもはるかに確信の強い推量を表わす。wahrscheinlich と vermutlich の推量の程度の違いは明らかではなく、この両者の相違は今後の課題としたい。offenbar は、話者が外見的事実を推量の根拠としている事を表わし、話者の確信が最も高い。しかしながら、offenbar のない文と比較すると分るように、offenbar を用いる事によって、話者は軽い疑念を表現しているとも言える。

〔 注 〕

1. Erben や Helbig/Buscha は様態を表わす副詞 (gern, fleißig usw.) を Modaladverb と呼んでいる。以下では様態の副詞と区別する為に、話者の心的態度を表わす副詞は Modalwort と呼ぶ。但し、Brinkmann の引用箇所では Modaladverb を使う場合もある。
2. Brinkmann, 1971. S.401-2
3. Helbig/Buscha, 1974. S.449-50
4. Modalwort は文頭に来る事が多い。この事は Modalwort が文全体にかかる事と関係すると考えられる。
5. 上野田鶴子、日本語・英語、「講座日本語学11」 1982. S.126
6. Brinkmann, 1971. S.361-2, 366ff.
7. Klappenbach (Hrsg.) の Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache には、vielleicht が日常語で不変化的に、依頼や質問に於いて丁寧の表現に用いられると説明されている。
8. この事は多くの文法書が指摘している。たとえば Grundzüge einer deutschen Grammatik. 1981. S.209, あるいは Helbig/Buscha, 1974. S.448
9. Schulz/Griesbach, 1970. S.355
10. 柴田武、ヨウダ・ラシイ・ダロウ、「ことばの意味3」 1982. S.90-93
11. Brinkmann, 1971. S.401
12. Erben, 1972. S.178, Grundzüge einer deutschen Grammatik, 1981. S.689, Helbig/Buscha, 1974. S.429
13. Brinkmann, 1971. S.401
14. Helbig/Buscha, 1974. S.429
15. Klappenbach (Hrsg.), Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache.

Bd.6, 1978.

16. Schulz/Griesbach, 1970.S.355

〔参 考 文 献〕

Agricola,E. (Hrsg.), Wörter und Wendungen. VEB Bibliographisches Institut, Leipzig. 1979.

Brinkmann,H., Die deutsche Sprache. Schwann, Düsseldorf. 1962.

Der grosse Duden. Grammatik. 1966.

Der grosse Duden. Bedeutungswörterbuch. 1970.

Erden,J., Deutsche Grammatik. Max Hueber Verlag, München. 1972.

Heidolph,K.E.u.a. (Hrsg.), Grundzüge einer deutschen Grammatik. Akademie-Verlag, Berlin. 1981.

Helbig,G./Buscha,J., Deutsche Grammatik. VEB Verlag Enzyklopädie, Leipzig. 1974.

Klappenbach,R./Steinitz,W. (Hrsg.), Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache, Akademie-Verlag, Berlin. 1978.

国廣哲彌編 「ことばの意味3」 平凡社、1982.

相良守峯編 「大独和辞典」 博友社、1968.

シンチンゲル, R. 他編 「現代独和辞典」 三修社、1982.

Schulz,D./Griesbach,H., Grammatik der deutschen Sprache. Max Hueber Verlag, München. 1970.

上野田鶴子、日本語・英語 「講座日本語学」 明治書院、1982.

Wahrig,G., Deutsches Wörterbuch. Bertelmann Lexikon-Verlag, 1968.

〔例 文 出 典〕

Brasch,T., Vor den Vätern sterben die Söhne, Rotbuch Verlag, Berlin, 1977.

Coulmas,F., Japanisch von außen gesehen, Asahi Verlag, Tokyo, 1983.

Dürrenmatt,F., Die Physiker, Verlags AG Die Arche, Zürich, 1962.

Endo,S., Schweigen, Verlag Styria und Verlag der Ev.-Luth.Mission, Graz, 1977.

Kawashima,A./Hioki,K., Köln am Rhein -Deutsches Lesebuch-, Dogakusha

Verlag, Tokyo, 1983.

Kilian,S., Der Stein, In: Jugendliteratur, Dogakusha, Tokyo, 1983.

Lenz,S., Heimatmuseum, Hoffmann und Campe Verlag, Hamburg, 1978.

Michels,T., Wie der Vogel gestorben ist, In: Jugendliteratur, Dogakusha Verlag, Tokyo, 1983.

NHK ラジオドイツ語講座 テキスト 1983 年

NHK テレビドイツ語講座 テキスト 1983 年

Rinser,L., Die gläsernen Ringe, S.Fischer Verlag, Frankfurt a.M., 1966.

Schneider,R., Krankenbesuch, Sansyusya, Tokyo 1975.

Walser,M., Ein fliehendes Pferd, Suhrkamp Verlag, Frankfurt a.M., 1978.

(北星学園大学講師)